研究ノート

感染禍における外部模擬患者を招聘することによる学内臨地実習での教育的効果

External Simulated Patients in Infection
Educational Effect of On-Campus Clinical Training by Inviting

能登由美子　澤田みどり

Yumiko NOTO and Midori SAWADA

旭川大学保健福祉学部保健看護学科

キーワード：外部模擬患者，小児看護学実習，学内臨地実習，子どもの理解

抄　録

本研究は，学内実習に外部から母児を模擬患者として招聘，学内臨地実習を行なうことで，学生の学内臨地実習での学びと教育的効果を明らかにすることを目的としている。

感染拡大により小児看護学臨地実習が学内代替となり，外部模擬患者を対象患者として実習を体験学習した。学生で協力を得られた３名の学生と外部模擬患者の母親１名を対象としインタビュー調査を実施した。結果，情報収集に関しては学生から２カテゴリー，母親から２カテゴリー。対象者への声掛けに関しては学生から１カテゴリー，母親から２カテゴリー。事前学習がケアに生かせたかに関しては学生から２カテゴリー，母親から２カテゴリーが抽出された。結論，外部から母児を外部模擬患者とした学内臨地実習では，学生は子どもの予期しない行動や言葉，表現に戸惑いその真意を理解できない，そして行動計画通りにケアできないことを体験し，振り返り，学びを深めていくことにつながっていくことがわかった。学内臨地実習では，その予期しない子どもの言動や反応を教員や学生が模擬患者として表現するには限界であり，外部模擬患者を招聘して学内実習を実施することで学生たちは実体験として学ぶ。ここに，教育効果があることが示唆された。

Ⅰ．は　じ　め　に

少子化が進む現代，若者たちは子どもに触れる機会が極端に少ない。それは看護学生も同様で，小児看護学臨地実習を通して子ども達と関わり，その体験から子どもの個別性のある成長・発達，子どもの権利，親の気持ちなどを理解し学んでいく。しかし，2019 年に発生した COVID-19 は瞬く間に世界各地に拡大し，それに伴い感染拡大防止のため臨地実習が中止となり，学内での代替実習を余儀なくされた。そのため，学生は，子どもと直接関わり学ぶ機会を失った。

日本看護系大学協議会看護学教育質向上委員会[1]が調査した結果では，「子どもとのコミュニケーションの代替えは難しく，教員や学生が模擬患者になるには限界があり，卒後の補填も難しく小児系に進むキャリア形成が築けないことが懸念されている」と報告している。つまり，教員が発達に合わせた患児役を演じたとしても，発達段階によって感情表現や言動の違う生きた子どもを知らない学生には，患児をイメージするには限界がある。小児看護の対象である保護者の感情もイメージすることもまた難しく，対応方法やケアの立案にまで至らない。「看護技術に関しての到達目標も，小児看護学では大きく下回った結果となっている」との報告同様に，患児の対応方法が考えられず，ケアの行動修正に至らないのが現状である。

本研究は，学内実習に母児を外部模擬患者として招聘，学内臨地実習を行なうことで，学生の学内臨地実習での学びと教育的効果を明らかにすることを目的と

している。

Ⅱ．用 語 の 定 義

1．外部模擬患者とは，学内臨地実習に協力していただける健康な母児を指す。
2．学内臨地実習とは，臨地実習と同様の実習目標・目的を設定し，学内で実習を実施することを指す。

Ⅲ．研　究　方　法

1．調査対象者

当該学内臨地実習を経験したA大学看護学科４年生の学生３名。

外部模擬患児の母親１名。

2．データ収集方法

実習開始前に対象者である学生に研究の主旨・概要を文書及び口頭で説明し研究協力の依頼をした。評価点によって参加の可否が左右されないように調査，面接は実習評価終了後，評価面談前に研究協力承諾の可否を再確認し，同意書にサインをいただいた。また，外部模擬患児の母親には，実習模擬患者依頼時に，研究の主旨・概要を文書及び口頭で説明し同意書にサインをいただいた。学内臨地実習終了後に調査，面接を行った。

3．調査期間

2021 年 10 月～ 11 月

4．調査方法

1）半構成的面接法。
2）対象者の承諾を得たのち面接内容を録音。その後逐語録を作成。
3）2）の内容吟味し，話の内容や言葉の意図を確認，要約してコード化した。
4）3）のコードを類似性と創意性から分類しサブカテゴリーを抽出した。
5）サブカテゴリー，カテゴリーの意味を検討し，それぞれを定義した。
6）データの客観性，カテゴリーの分類などの整合性を共同研究者と確認，分析した。

5．調査内容

本研究の目的に沿い，各調査対象者に同じ主旨の質問を半構成的面接法にて実施。

1）どのように情報収集を行ったか
2）対象へどのように声掛けをしたか
3）事前学習をどのようにケアに生かせたか

6．倫理的配慮

面接場所：個人のプライバシーが守られる個室を確保し実施。

所要時間（対象者を制約する時間）：模擬患児の母，学生ともに１名につき 30 分程度。

感染防止対策：新型コロナワクチン予防接種を２回接種もしくは，PCR検査で陰性を確認。その上で，全員がマスク着用，フェイスシールドを装着し実施。学生及び母親に，研究対象者のプライバシーは保護され個人は特定されないこと，研究の主旨，匿名性の厳守，得られた情報は，研究以外には使用しないこと，任意であり非協力であっても不利益を被らないことを説明。取得したデータや個人情報の電子ファイルはセキュリティ機能付きUSBに保存し，万全を期した保管をする。本課題について研究を継続し今回得られたデータを使用する場合，３年経過した時点で破棄することを説明し同意を得た。

本学研究倫理委員会の承認を得て実施した。なお本研究は，開示すべき利益相反はない

Ⅳ．結　　果

1．分析結果の概要

1）学生からの回答分析結果，面接内容，逐語録から，1）「どのように情報収集をしたか」24 コードから２カテゴリー「疾患への意識」「成長・発達への意識」を抽出。2）「対象者にどのように声掛けを行ったか」29 コードから１カテゴリー「子どもの気持ちを考えた」を抽出。3）「事前学習をどのように看護ケアに生かしたか」27 コードから２カテゴリー「積極的な行動」「実際の子ども」を抽出した。

学生は，「学内で教員が子どものモデルとして行っているときは，それほど強い緊張感はなかった」しかし，実際の母児と対面したとき，「子どもと接する機会がないため，子どもに話かけるとき強い緊張感があった」と事前学習が生かせなかったことに対して回答していた。また，戸惑ったこととして「外部模擬患者なので，どこまで情報収集をしてよいのか迷った」との回答があった。

（表1・表2・表3参照）

2）母親からの回答分析結果，面接内容，逐語録から，1)「学生はどのように情報収集をしていたか」10コードから2カテゴリー「学習不足を感じた」「意欲を感じられた」を抽出。「学生の対象者に対する声掛けをどのように行っていたか」11コードから2カテゴリー「子どもへの配慮」「母親への配慮不足」を抽出。「看護ケアで感じたことは」10コードから2カテゴリー「事前学習が生かされている」「想像力の低さ」を抽出。また，「実習をしながら必要以上に学生同士で話し合っていたけれど，実際に臨地実習ではできないことではないか」と学生の実習中の行動について母

表1　対象に対してどのように情報収集したか

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
疾患への意識	既習および事前学習	学習したことを生かした
		意図的な情報収集（2）
		返答に対してより具体的に聞いた
		的外れなことは聞かない
成長・発達への意識	対象への言動	子どもと母親の表情をみて（3）
		母親が子どもにかける言動を参考にした（3）
		子どもをほめるときの声掛けを意識しながら（2）
		予想外の答えに対して考えながら聞いた
		子どもが答えてくれない
		子どもに首を傾げられたとき
	成長発達に伴った言動・声掛け	発達に合わせた言葉使い（2）
		子どもの言動から学習してきた発達段階を考えた（3）
		視線を意識した
		視界に入るようにした

表2　児や保護者に対してどのような声掛けをしたか

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
子どもの気持ちを考えた	不安軽減・理解への工夫	不安軽減につながる説明
		不安を取り除く説明
		事実を伝えながら恐怖をそそるような言葉は使用しない
		人形やおもちゃで子どもが理解できる説明
		子どもの気持ちをつなぎ留めておくようにおもちゃを使用（3）
		成長発達にあった説明
		視線を合わせて説明した
		子どもが理解できる言葉の選択（2）
		絵本の読み聞かせ（3）
		見下ろさないように意識して説明した
	母親の子どもへの対応	母親がそばにいることを説明（3）
		母親から離さない工夫（3）
		母親を交えて説明
		母親の言葉を参考にした
		母親の接し方をみて言葉や話し方を変えて話しかけた
	不安にさせない関わりへの工夫	急な入院に対して不安軽減できるような声掛け
		自分たちの声掛けで不安にさせない
		医療者である母親にどこまで説明が必要なのか悩んだ（2）
		医療用語を正しく使用する緊張感が伝わらないようにした

表３　看護ケアは事前学習をどのように生かせたか

積極的な行動	既習および経験に基づいた説明・声掛け	積極的に子どもへ既習を基に声掛けができた
		既習を基に子どもに過剰な手伝いをしないようにした
		幼稚園実習で学んだことを生かした
		練習を重ねたことで説明できた
		キワニスドールの効果がわかり説明するとき積極的に使用した
		理解に繋がる説明は同意を得られ協力につながる
実際の子ども	想定外の言動に対応できない	緊張感で思うように行動できなかった（3）
		疾患の理解不足で必要なケアができなかった（3）
		情報と結び付けた瞬時のアセスメントができなくケアをするときに必要以上に考えてしまった（2）
		成長発達の個別性に戸惑い、ケアに生かせなかった（2）
		突然泣いたら何もできなくなった（3）
		想定外の返答にケアが進められなかった（3）
		同意をしてくれないときの説明ができずケアができなかった（2）
		想像がつかないことが多くケアに戸惑った（3）

表４　学生はどのように情報収集を行っていたか

学習不足と感じた	情報収集不足	最終的に聞いてこないことがあった
		掘り下げて聞いていない
		疾患の症状に関する質問が不足していた
		発達に関しての質問が不足
		発信した信号はくみ取れていなかった
		学生同士で話し合う時間が多く感じた
		役割のない学生が消極的だった（1 名の学生）
		聞いてきた内容は浅かった
意欲が感じられた	事前学習を生かそうとしていた	緊張していたようだが質問内容、言葉を選んでいた
		事前学習を生かして質問をしていた部分もあった

表５　学生は児や母親に対してどのような声掛けをおこなっていたか

子どもへの配慮	発達の事前学習	情報収集に集中し子どもへの配慮がなかった
		発達段階を考慮した声掛けではなかった
		教員からの促しがあっても行動変容にまで至っていない（1）
		４歳を意識して個別性も考えて遊びながら行っていた
		子どもの遊びたい気持ちに配慮しながら声掛けをしていた
		子どもと離さないように配慮しながら母親に質問できていた
		教員のアプローチで子どもに配慮し声掛けをしている（2）
母親への配慮不足	母親の身体的・心理的の理解不足	入院によって困ることが考えた声掛けがない
		母親の疲労感に対する声掛けがない
		入院する母親の気持ちに対する声掛けがない
		ベッド上で過ごすことへの安全性や声掛けがない

表６　学生の技術で感じたことはなにか

事前学習が生かされている	安全・安楽なケアの実施	不安は感じなかった
		子どもも怖がってはいなかった
		危なっかしさもなく安心してみていられた
		技術は問題なかった
		滞りなくできていた
		子どもの気をそらせようとする関わりがよかった
		緊張感が強いことが伝わってきた
想像力の低さ	個別性に合わせたケアの実施不足	子どもを想像する力が弱い
		発達に合わせた遊びを考えるが、子どもに合わせた行動変容が弱い
		母子関係を理解した関りが弱い

親は回答されていた。（表４・表５・表６参照）

Ⅴ．考　　察

新型コロナ感染症が拡大し，臨地実習は学内実習への代替実習へと変わった。見慣れた場での実習は臨地での実習に比べ緊張感の低下があり[2]（浜崎ら），臨地でしか学ぶことのできない内容，感覚，想定外の乳幼児の啼泣や言動など学内実習でのシミュレーションでは再現困難な場面[3]として学内臨地実習についての課題を報告している。本学学内臨地実習においても同様の傾向がみられ，患児や母親役割を果たす教員や学生仲間では，緊張感がなく，リアリティさに欠け，本来の子どもがみせる想定外の言動を表現することの限界がみられた。岩佐[4]は「経験型実習教育」を提唱する中で「知識を深め思考過程を育てる内容であれば学内実習でも十分に対応できるが，自分自身が体験をすることで学ぶ内容に関しては口頭説明では理解困難である。」と述べ，安酸[5]もまた，小児看護学実習に対して同様の課題を述べている。さらに，泊[6]らは，小児看護学実習における学習の実践的課題を理解する構造の中で「子どもの反応の意味や真意を考え理解する難しさ」を考察し，子どもの反応を読み取ることや，子どもの反応に合わせて行動計画，方法を考える難しさを課題として，「理解と実践の積み重ねが思考過程を進展させる」と報告している。本研究でも学生は，子どもが表現する行動に戸惑い，同意を得ることの難しさに困惑し，実際の子どもの言動にアプローチの方法を見出すことができなかった。これらの外部模擬患者に対面し学んだ体験から，事前学習や事前練習を行い知識や技術があっても，子どもの予測できない反応に対応することは困難であることを学び，自己の行動や言動を振り返り，子どもへの対応を繰り返し考えていくことで小児看護の実際，対応策，小児看護ケアを学び「ケアアプローチ方策」を熟考していくことができると考える。そのため，実際の子どもとの関わりを経験できる外部の模擬患者の招聘は教育的効果があると言える。

また，今回の学内臨地実習では，小児看護の対象である母親からは配慮不足という回答があった。西田[7]らによれば，「児と母親が模擬患者として参加した演習では，学生は母親が子どもに接する場面から家族への対応の具体的方法がイメージできた」と報告されている。本研究では，「母親の子どもへの対応を参考に，子どもへのアプローチの方法に生かすことができた」と学生は回答している。さらに母親からも子どもへの配慮はされていたと回答があった。このように，子どもとの関わりを考えることはできた。一方で，母親を子どもとの関係性を作るための存在としてしまい，母親の基本的欲求や心理的側面に関して考えることができていない。これは，子どもとの関係性を構築することに集中してしまい，母親の身体的・精神的な苦痛まで想像し，配慮することが難しかったためであると推察する。学生は，子どもと対面することで戸惑ってしまい，事前に計画していた母親に対する配慮ができなかったことを実感した。子どもの真意を読み取り，なおかつ母親を含めた看護ケアを提供しなければならない小児看護の難しさを学び，その後の振り返りをすることで事前学習が生きた学びにつながると考える。

反面，母親からは，学生の学習不足を指摘されている。しかしこのことは上述したように，実際の子どもの反応や言動に戸惑い，対応方法がわからない，考えた行動計画ができなかったこと，子どもとの関係構築に集中してしまったことが要因で，事前学習が生かされなかったと考えられる。情報不足では，子どもとその家族のニーズや健康問題を十分に把握することがで

きず，個別性を考えた看護過程の展開につながらない。つまり，対象者に必要な看護実践は行えていない。外部模擬患者でリアリティのある実習を行うことは，できない自分にも気づき，十分な情報収集することの大切さについても気づく機会となっている。

Ⅵ．結　　論

外部の模擬患者を招聘した学内臨地実習を通して学生は，

1．予測できない子どもの想定外の言動，表現などを体験学習することができる。
2．事前学習で知識を身につけても，子どもの反応や表現，言動の真意を理解することができないと実際にケアすることは困難である。また家族への看護も含めて考えることはより難しいことを学ぶことができる。
3．外部模擬患者との対面，経験学習の結果で，自己の行動や言動を振り返り，行動計画の修正などを行い，積み重ねることが学びとなる。
4．教員や学生が模擬患者となって実習するには，子どもの想定外の言動などを表現するには限界があることがわかった。
5．外部からの模擬患者を招聘した学内臨地実習は教育的効果がある。
6．ただし，外部模擬患者との対面後には，教員などによる十分な振り返り学習が必要になる。

研究の限界と課題

本研究では，学生の対象人数が数人の調査であったため，教育効果を断定するには限界がある。感染状況を判断しながら学生の対象人数を増やし，様々な意見を積み重ねて調査し追求していきたい。

引用・参考文献

1）日本看護系大学協議会　看護学教育室向上委員会：2020年度COVID-19に伴う看護学実習への影響調査　A調査・B調査報告書，一般社団法人　日本看護系大学協議会．10．2021.
2）浜崎眞美・福永宏子・庵木清子・竹中正巳・谷川知士：コロナ禍における介護実習代替えとして取り組んだ学内実習の検証，鹿児島女子短期大学紀要，第58号．55．2021.
3）新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議報告書：看護系大学における臨地実習の教育の質の維持・向上について．1-10．2021.
4）岩佐有子：コロナ禍における小児看護学実習の成果と課題，京都看護，第5号．74．2021.
5）安酸史子：学生とともにつくる臨地実習教育，看護教育，第41巻．2000.
6）泊裕子・大西文子・竹村淳子・西薗貞子・川島美保，小児看護学実習において「実践と理論の統合」を必要とする学習課題の構造，日本看護科学会誌，40巻．478．2020.
7）西田千夏・合田友美・中尾幹子：看護系大学における小児看護学技術演習に乳児と母親が模擬患者として参加する意義－学生の学びと母親への影響－，香川母性衛生学会誌，19巻1号．12．2019.